

日本語初級教科書における敬語の扱いについての一考察

学校教育研究センター 渡 邊 裕 子

学校教育学研究 第6巻 抜刷 1994年3月

兵庫教育大学 学校教育研究センター

Reprinted from the Journal of School Education, vol. 6, 1994

Center for School Education Research

Hyogo University of Teacher Education

日本語初級教科書における敬語の扱いについての 一考察

学校教育研究センター 渡邊裕子

日本語教育に携わるものは、日本語が使用されている社会において通用する日本語を教授すべきである。学習者に、話し手（書き手）が聞き手（読み手）や話題の人物をどの様に待遇しようとするかを、ふさわしい言語形式で表現することができるよう指導しなければならない。日本語教科書4種類について、「敬語形式」がその教科書のどの段階で初出の項目として紹介されているか、また解説の仕方はどうかについて調査を行った。その結果「教科書全体にわたって敬語形式が現れている」事が分かった。教科書全般にわたって自然な対話（会話）の中で用いられているのは、日本語学習上も好ましいことである。しかし、説明、解説については、'polite'という語の使われ方に問題があり、各教科書により情報の異なる事が分かった。「尊敬語」「謙讓語」によって説明しきれない敬語を用いる状況についての教授者側の知識、情報が必要であろう。

キーワード：日本語教育、敬語形式、尊敬語、謙讓語

1. はじめに

日本語教育においては、日本語が外国語あるいは第二言語として教授される。そこで用いられるシラバスが構造シラバスであれ、場面シラバス、機能シラバスであれ、或る一定の言語形式が、或る意味を表していると言う提出のされ方がなされている。そして、日本語教育を行うことにより、学習者が日本語によるコミュニケーションができるようにしなければならない。戦前の日本語教育でも問題にされていたが、日本語を母語としない者が学ぶ日本語は、日本語を母語とする者が使用している日本語と同じである必要はないと言う考え方も現在あるが、教育を与える側としては、当該言語使用社会において、通用する言語を教授すべきであると筆者は考えている。

日本語を母語とする者であっても、学生生活を終え、職業人として社会に踏み出した際、彼らの用いる日本語が、その場にふさわしいものであるとは限らず、新人研修の場で、言葉使いが講習されているらしい。問題となっているのは、話し手（書き手）が、聞き手（読み手）や話題の人物をどの様に待遇しようとするかを、ふさわしい言語形式で表現しているかどうかと

言うことである。日本語教育においても、この問題は避けては通れない。一般的に、「敬語」と言われているものである。（この言葉のもとにどのようなものが分類されるかについても、学者によって異なっている。）

普通、日本語教育ではなんらかの日本語教科書が教材として用いられている。その日本語教科書に現れた敬語形式とそれに対する説明から、どのような敬語観によって敬語を分類し、どのようなものを日本語教育上必要なものとして教授しようとしているかが窺えると考えられる。すでに、川口義一(1987)において、4種類の教科書について、その教科書の進度のどの段階で初出の項目として紹介されているか、どのような敬語が形式が扱われているか、解説の仕方はどうなどについて調査が行われている。近年、機能シラバスに基づく日本語教科書が作られるようになったこと、そして川口の調査から6年もたっていることから、川口によって扱われなかった教科書、及びその調査以後に作られている日本語教科書について調査を行い、川口の指摘している、「敬語が文法要素の一つとして扱われており、教科書の特定の課に集中して多量に提出される傾向がある」「敬語の語法上の解説が不十分な、

あるいはなされていない場合がある」について見ることは意味のあることと考える。

今回の調査で対象とした日本語教科書は、以下の4点である。

- (1) Association for Japanese-Language Teaching *Japanese For Busy People I* (1984) & II (1990) (全30課+40課) 講談社インタナショナル
- (2) 文化外国語専門学校 『文化初級日本語 I』 (1987) 『文化初級日本語 I II』 (1987) (全37課) 凡人社
- (3) Susumu Nagara 他 *Japanese For Everyone* (1990) (全27課)
- (4) Tsukuba Language Group *Situational Functional Japanese vol.1* (1991), 2 (1992), & 3 (1992): Notes (全24課) 凡人社

“Japanese for Busy People I”は50時間の学習を予定する、一般社会人向けの教科書である。それに続く“Japanese for Busy People II”は、240時間の学習時間を予定し、一般社会人及び大学生向けの教科書である。『文化初級日本語 I & II』は、留学生向けの教材で、副教材も含め、それぞれ150時間の学習を予定する教科書である。媒介語を使わないで授業することを前提としている。“Japanese for Everyone”はその名が示すように、学習対象者もまた学習者の年齢も、限定するものではない。‘notional-functional approach’によっており、機能シラバスと構造シラバスの両方によっている。

“Situational Functional Japanese”は、「従来の伝統的な文法積み上げ式の日本語教科書とは異なるアプローチを採っている」(p.3)もので「文の構造に関する重要事項は、いくつもの課にわたって繰り返し関係づけて説明する」(教師用指導書p.6)教科書である。筑波大学留学生センターでのインテンシブコースの場合、約350時間で3冊を終えることになっている(同書p.10)との事である。

2. 敬語形式の分布

調査の方法としては、先行研究の手順に倣い、

各教科書で種々の敬語形式が何課と何課に出て来るかを調べた。その際の敬語形式として、川口(1986)の分類は29項目となっていたが、そのうち、疑問に感じた項目に関しては以下のような修正を行った。

- (1) 「謙譲語特殊形式(アガル・イタダク・ウカガウ等)」と「謙譲語特殊形式+ます」は区別せず、「謙譲語特殊形式」とした。
- (2) 「お／ご[名詞](オテガミ<ヲサシアゲル>など)」、「お／ご[名詞・副詞]」、「お／ご[形容詞・名詞](オタカイ・オミヤゲなど)」の3項目は、「お／ご[名詞](尊敬)」、「お／ご[名詞・副詞](美化語・丁寧語)」とした。
- (3) 「[イ/ナ形容詞・名詞]ございます」については、「[名詞・ナ形容詞]でございます」、「[イ形容詞]ございます」とした。

表1から観察されることは、以下のような事である。

- (1) 尊敬語特殊形式及び謙譲語特殊形式、すなわち、特別な動詞によって表現される形式は、説明が行われ、その課のポイントとなっている或る特定の課以前に既出となっている。(2) 4種類の教科書とも、「お／ご[名詞](尊敬)」、「お／ご[名詞・副詞](美化語・丁寧語)」は、教科書全体にわたって現れている。(3) それぞれの敬語形式の扱いに関して、軽重がある。それは、取り扱われる課の数の違いに現れている。例えば、「一れる／られる(尊敬)」は、「尊敬語特殊形式」に比べ提示されている課が少ない。

この4種の教科書のうち、『文化初級日本語 I・II』のみが、教科書中に英語による各々の尊敬形式についての説明がなされていない。教師用の指導手引書には、赤字印刷によって日本語による説明がなされている。川口は、「敬語形式のもっとも多く現れる『特定の課』が敬語を学習項目の中心にしており、解説・練習なども当該の課で扱われている」及び「『特定の課』より前の課では敬語形式がほとんど現れない」という特徴は持たず、「教科書全体にわたって敬語形式が現れている」(p.128)という特徴を持つ教科書が敬語指導上有利な条件を備えたものである、と述べているが、本論においては、

表 1

	JFBP	文化	JFE	SFJ
尊敬語特殊型形式	7, 12, 13, 26(I)	8, 11, 19, 21	10, 11, 16, 18	3, 4, 7, 9, 10
(特別な動詞 を用いる)	12, 29, 31, 33, 35 (II)	23, 25, 29, 30 31, 33, 34, 37	21, 23, 24, 25 26, 27	13, 14, 16, 18 19, 20
お/ご (stem) になる	33, 37 (II)	30, 31	21, 24	10, 18, 19, 23
-れる/-られる (尊敬)	37(II)		25, 26	19
[漢語サ変] なさる される				
-ていらっしゃる	33 (II)	30, 31	27	9, 18
-でいらっしゃる				
お/ご (動詞stem) だ	9, 18(II)	23	21	9, 10, 23
謙讓語特殊形式	13, 17(I)	22, 24, 29, 30	11, 12, 15, 16	1, 3, 4, 7, 8
(特別な動詞 を用いる)	13, 16, 22, 32 37(II)	31, 32, 37	25	10, 13, 18, 19
お/ご (動詞stem) する	1, 26(I) 3, 12, 22, 27, 33 34(II)	22, 30	1, 4, 5, 10, 11 14, 15, 16, 21 24, 25, 26, 27	2, 7, 9, 10, 13 14, 16, 18, 19 21
お/ご-もうしあげる -いたす	33(II)		25, 27	
お/ご-願う				
お/ご+名詞 (尊敬)	12, 17, 20, 21 23, 24, 26, (I) 3, 6, 10, 12, 14 16, 18, 19, 22 26, 29, 33, 34(II)	11, 24, 30, 37	8, 9, 10, 11, 13 16, 21, 22, 23	1, 3, 6, 11, 12 15, 16, 17, 18, 19, 22, 23
お/ご+名詞・副詞 (美化語・丁寧語)	9, 13, 18, 19 23, 25, 29(I) 6, 8, 12, 15, 16, 17 19, 20, 22, 24, 26 27, 29, 31, 32, 35 37, 38, 39, 40(II)	5, 10, 16, 25 26, 28, 29, 31	4, 10, 11, 12, 19, 22, 24	3, 10, 11, 17, 22, 24
お/ご [イ/ナ形容詞]				8, 13, 22
-ております	33 (II)	30	16, 25, 27	11, 15, 18
-てまいります			25	
-てございます				
お/ご-くださる				
お/ご-いただく	33 (II)			19

	JFBP	文化	JFE	SFJ
－てさしあげる	3(Ⅱ)		27	14
－てくださる	23, 29, 31 33(Ⅱ)	29	27	14, 21
－ていただく	31(Ⅱ)	29	26, 27	14
(お/ご)－させて させていただく	29, 33(Ⅱ)	35	26	22
(名詞・ナ形容詞) でございます	12, 21(Ⅰ) 11, 12, 22, 23 33(Ⅱ)	19, 24, 30, 31	6, 11, 25	3, 10, 18
(－が) ございます	12, 22(Ⅱ)	19		23
お+形容詞+ございます				
お/ご 動詞stem ください	7, 12, 20(Ⅰ) 3, 10, 12, 18, 22	12, 16, 19, 21 24, 29, 30, 31	5, 6, 10, 21 25	3, 9, 10, 11, 14 18, 19
(「おーになって ください」を含む)	23, 29, 33, 35 36(Ⅱ)	34, 35		
－てください/ いただけませんか	18, 24, 34, 36 38(Ⅱ)	30	10, 13, 21, 25	7, 8, 14, 20 21, 23
です/ます+連体修飾語 ・従属句	23(Ⅱ)		7	
(お)－なさい		5		

JFBP: Japanese for Busy People
 文化: 文化初級日本語
 JFE: Japanese for Everyone
 SFJ: Situational Functional Japanese

4種類すべてについて、当てはまると言えよう。もちろん、全ページ数の違いから、『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』が量的に一番少なくなっているのだが。

それぞれの教科書に見られる特徴を述べると、『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』は先にも述べた通り、文法・構造などについての説明の記述が教科書中に全くないので、教師の適切な説明が与えられないと、全く、形式も機能も意味も理解し得ないであろうと予測される。また、「尊敬特殊形式」「お/ご(stem)になる」、「謙譲語特殊形式」、「お/ご(stem)する」などについて、教科書の最後の課に近い課(30課)で同時に提示されている。“Japanese for Everyone”は具体的説明がなされる課以前に、会話文な

どの中で提示しておくという手法を「尊敬語特殊形式」、「謙譲語特殊形式」などで採っている。

“Japanese for Busy People”においても或る敬語形式が或る特定の課においてのみ扱われると言うことが、他の教科書と比べて多いと言うことはないが、vol.Ⅱの最後の方の課(33課)において、説明が専らなされていると言える。

“Situational Functional JapaneseⅠ・Ⅱ&Ⅲ”がこの四つの中では特に、全体にわたって敬語形式がちりばめられていると言え、また、或る特定の課に説明が集中されてはいない。これはこの教科書が、文型積み上げ式のものではなく、状況・機能シラバスと文法シラバスの併用となっているからだと言えよう。

3. 「敬語」に関する解説について

教材としての日本語教科書を考えると、教科書上に十分な解説が載っていることは必要なことであろう。さもないと、教授者側により多くの負担がかかることになる。しかし、日本語の教科書は文法書でも文法解説書でもないのだから、「敬語」について分かっている（分かっていると思われる）全てが掲載されているわけではない。そして、あらゆる事が掲載される必要もない。日本語学習者が日本語を学ぶ際に、矛盾なく学習することができ、適切な日本語を運用することができるようになることを目指していれば良いのである。以下において、『文化初級日本語I・II』以外の3種類の教科書について見ていく。

〈Japanese for Busy People〉

(1)敬語についての説明のある課(vol.II L33)以前に語彙の所でなされている説明が曖昧である。例えば、第7課(vol.I)で、「いらっしゃる」は「来る」の'polite word'であるとし、第12課(vol.I)で、「でございます」は「です」の'polite word'であるとし、第13課(vol.I)で、「いただく」は「食べる」の'polite word'としているが、ここで'polite'という意味は曖昧であり、敬語という視点の中での姿が見えてこない。

(2)第12課で、「かとうですが、ごしゅじんはいらっしゃいますか」の「ごしゅじん」の「ご」については、'honorific, referring to someone else's-'と説明があるが、「お茶」、「お酒」などの「お」については、vol.Iでは説明がない。しかし、vol.IIに入り、第3課のNotesのところ「御紹介」、「御案内」、「好きなもの」、「御相談」、「御住所」の場合の「お／ご」は、「話しかけられる人物や、その人物と関係あるものに対して敬意を表すため」であり、「『お金』、『お砂糖』、『お茶』のように、受け手ではなく、主語となっているものによって使用法が決定されているいくつかの場合がある。『お』あるいは『ご』が付加されるかどうかは、単に使用法の問題であり、それは女性の間でより普通に行われている。」と説明を

行っていて、いわゆる美化語について、きちんと紹介されているのは良い。

(3)第3課(vol.II)において、「おまちください。」の様な、「お＋ますstem＋ください」は、丁寧ではあるが、少しビジネスライクだと言う説明がなされている。第9課(vol.II)「おでかけですか。」については、敬語の用法と関係して説明は行われていないが、第18課(vol.II)において、もう一度「お届けですか。」を取り上げ、'politeness'あるいは'respect'を表現する一つの方法であると説明している。

(4)「いただく」、「さしあげる」、「くださる」の説明は、第31課(vol.II)であるが、「もらう」、「あげる(orやる)」、「くれる」の'polite counterparts'という説明だけでは不十分ではないだろうか。

(5)第22課(vol.II)のNotesに、「お＋ますstem＋する」について次のような説明がある。「このボタンは自分自身の、あるいは自分自身のグループの者の行為を控え目に言うものである。或る動詞にあっては、同様の丁寧な効果が別の単語の使用によってもたらされる。(p.170) 'humble'という言葉で説明がなされるのは、第33課(vol.II)においてである。また、第33課においては、「お＋ますstemになる」、「お＋ますstemする」、尊敬・謙譲特殊形式を含め、敬語についての全般的解説がある。そして、敬語の使い分けの決定因子の一つが、'order of hierarchy' (階層の順序)で、もう一つが、'ingroup-outgroup relation'であるという。この説明は他の教科書においてもしばしば書かれているものである。しかし「敬語は主として現在の関係に限られる。知らない人に関連しているところで用いられるのは普通の事ではないし、人々が有名であったり、名前だけによって知られている歴史的な人物に関するときにも、用いられるのは普通でない。(p.252)」という解説は今回調査した他の教科書には見られないものである。

(6)第37課において、'respect language'としての「一れる／一られる」について、「様式化された、丁寧なコミュニケーションボタンは男性

によって、より普通に使用され、商工業の世界においてしばしば聞かれる。(p.280)」とあるが、何を根拠にそう言えるのであろうか。

〈Japanese for Everyone〉

(1)「さしあげる」、「くださる」、「いただく」についての説明が、「敬語」という視点からみると一貫していない。「さしあげる」は「あげる」の'honorific form'だと説明しているが、「くださる」は単に授与者が同等の者か目上の者とと述べるにとどまり、「くれる」についても授与者が同等の者あるいは目下の者を示唆すると書いているので、授与者が同等の者の場合の使い方に関してはなんら説明がないことになる。「いただく」は授与者が同等の者あるいは目上の者の場合の、'polite speech'において用いられるとあるだけで、ここで言う 'polite speech'が何を指しているかが不明瞭である。

(2)第16課では、「ーております」について、'humble progressive form, meaning the same as「ーています」'と言う説明がちゃんとなされている。また同課における、'Respectful speech'についての説明は以下のようになっている。「あなたのスピーチの中に或る程度の量の尊敬を示すことは、しばしばふさわしいことである。これには、あなた自身の事を話すときには謙讓語(humble terms)を用い、他人についてあるいは他人に話しかけるときには尊敬語(honorific terms)を用いることによって達成される。普通に用いられる謙讓語と尊敬語のいくつかは下の表にあげてある。中立語の代わりにいつ謙讓語と尊敬語を使うべきかについて確定した規則を与えることはできない。それは、状況及び話しかけられる人物の性質(nature)をいかに見るかによっている。女性は'respectful speech'をより多く用いる傾向がある。また、尊敬すべき外部の者(respected out-sider)に話しかけると、自分自身(oneself)は拡大し、家族の構成員、同じ会社の従業員、同じ団体の要因などを含む。(p.204)」なお表の中には、「おーする／おーなる」は載っていない。

(3)第21課において、Showing respect (1): honorific and humble verb constructionsと

して「1. お+Verb stem +になる／なります honorific—他人の行う行為について話すときに用いられる。 2. お+Verb stem +する／します humble—あなた自身の行為に言及するときに用いられる。 3. お+Verb stem +です honorific—誰か別の人が行っていることを述べるのに用いられる。(p.264)」と言う説明がある。また、同じ課に、「Honorific request form:お書きください」が提示され、次のような解説がなされている。「尊敬依頼形式は、依頼をするためあるいは指示を与えるために公式的な状況あるいはビジネス環境において用いられる。一方、これまでに学んだいろいろな丁寧な依頼形式は個人的あるいは社会的な状況において用いられる。(p.266)」さらに第25課において、Showing respect (2):further honorific and humble expressionsとして、'polite'に対応する'honorific'および'humble'の語がリストになって載せられている。受身形を用いる尊敬表現は、Noteの中でふれられており、「これは日常会話では非常に普通であるが、受身表現の表す尊敬の度合は他の形式と比べ幾らか低い。(p.304)」と述べている。

(4)いわゆる美化語を作る「お」については、第4課で、'prefix added to various words to make them polite'と述べるにとどまっている。

〈Situational Functional Japanese〉

(1)第1課から第9課までにおいて敬語形式がちりばめられているが、第9課において「敬語」の説明が行われている。「敬語は目上の人を扱っているとき、形式ばらないスタイルあるいは形式ばったスタイルの談話のどちらとも一緒に用いられる。(p.17)」「尊敬形式は普通、聞き手(あるいは話題の人物)が目上の人の場合用いられる。目上の人には、よく知らない人だけでなく先輩学生、教師、年上の人々が含まれる。(p.18)」第9課では、'Irregular honorifics'(敬語特殊形式)が表となって載っている。第10課では、'Regular honorifics'として、「お+[V(base)]+になる／なります」が載っている。そこで、「行く、言う、いる、見る、来る、する」についてはこのパターンを採らないことの

注がある。同じ課に'Honorific requests'として、「お+[V(base)]+ください」、「ご/お+verbal noun+ください」が提出され、「ーてください」より遙かに丁寧であると説明している。第18課に入り、敬語としての'humble'が説明される。「honoric formが主語が(聞き手を含め)誰か別の人であるときに用いられるのに対し、'humble'の表現は、あなたという話し手(あるいは、あなたの家族のメンバー)が主語のとき用いられる。

先生：ケーキ、食べますか。

鈴木：はい、いただきます。(p.30)と言う対話において、「鈴木さんは、食べると言う彼自身の行為に言及するために(食べるのhumbl e form)いただくを使って答えているが、それは、彼が社会的に高い地位にある人物(木村先生)に対して話しているからである。同じ話し手が、木村先生自身の行為について言及するときには尊敬形式(honorific forms)を用いる。従って、尊敬語、謙讓語両者は聞き手の地位を高めることによるか(尊敬語)話し手の地位を低めることによって(謙讓語)、基本的に社会的地位の違いを表現する同じ目的を持っているのである。(p.30)」ここで、「お+[V(base)]+する/します(いたす/いたします)」と言うパターンによって作れるものの説明があり、特殊形式のものは表として載せられている。以上の説明は従来の日本語のテキストと同様の情報であり、何も目新しいことではないが、次の説明は注目に値すると考える。

「以下に例証するように、もしそれが直接に上位の人(聞き手も含め)に関係がないのなら、謙讓表現はあなた自身の行為に言及するために用いられない。

(a)小川：図書館で本をお借りになりましたか。

鈴木：はい、借りました。

(b)小川：木村先生に本をお借りになりましたか。

鈴木：はいお借りしました。

(a)は謙讓の動詞を使っていない。理由は、図書館から本を借りることは純粋に鈴木さんの個

人的関心事であって(聞き手を含め)他の人々と関係がないからである。それに対し、(b)においては謙讓の動詞が用いられているが、鈴木さんは目上の人である木村先生からその本を借りたからである。(p.33-34)」また、「まいります」、「おります」、「もうします」、「でかけます」、「いたします」については、他人との関わりの如何に関わらず丁寧のために用いられる例外であると述べているが、上記の説明につなげるために必要な事であろう。第19課で敬語として'passive honorific'が提出されており、「受身形による尊敬語はいくらか正式でない感じがするしまた若者の間でよく用いられる。(p.68)」という説明が加えられている。しかし、尊敬形式の他のものとの敬意の度合の違いについての言及はない。(2)第13課において、「さしあげる」、「いただく」、「くださる」が説明されている。「受け手が与え手よりも社会的地位が高いとき『さしあげる』が、用いられる(p.136)。「家族のメンバーに関しては、『さしあげる』は決して用いられない(p.137)。「与え手が受け手より上位者の場合、『いただく』が用いられる(p.137)。「与え手が話し手より、あるいは話し手のグループのメンバーより上位者のとき、『くださる』が用いられる(p.138)。「家族のメンバーに言及するときには、『くださる』を使ってはいけない(p.140)。「さしあげる」についてはさらに第19課で贈物を送るときにふさわしくない表現として次の二つの例が挙げられている。

(×) 学生：先生にこれをさしあげます。

(×) 学生：先生、これをさしあげたいんですが。(p.75)

しかし、その理由は述べられていない。

(3)まとめ5のセクション(p.126-127)に、既習のパターンが実は敬語を使っての表現であったと、a.質問 b.依頼 c.指示 d.申し出 e.許可の求めという発話意図別に載せてあるが、これは単に敬語のための敬語学習ではないことを学習者に納得させられるので良い試みであると考えられる。

(4)第1課モデル会話(p.2)中の「お国には。」,

「ご専門は。」における、「お」、「ご」について、'お is for politeness''ご is also for politeness' と言う説明がある。(p.4) また、第9課において「ご／おーなさる／なさいます」で、「ご」「お」の付く'verbal noun'のついで言及はあるが、いわゆる美化語を作る「お」「ご」については述べられていない。(なお、引用部分の日本語の訳文は筆者による。)

4. さいごに

(1)今回調査した日本語教科書では、敬語の説明の仕方としては、従来通りの「尊敬語」「謙譲語」を中心として、それを表す表現形式との関係で説明しようとしていることが分かった。その説明の過程で'polite'という語が多く用いられていたが、日本語全体を見た場合の'polite'と'plain'の対立があるのだから、ただ便利だからと言って、安易にその語を用いることは戒められるべきであろう。(2)例えば、「尊敬語」「謙譲語」と言っても、それを適切に用いることがむずかしいわけである。その意味でも、従来型のテキストと異なり、今回調査したものでは、テキスト全般にわたって、自然な対話(会話)の中で用いられているのは、日本語学習上好ましい事である。さらに、'Situational Functional Japanese'にだけ説明があったのだが、謙譲表現の使用上の制限についての情報は必要であろう。(3)いわゆる美化語、丁寧語を作る「お」「ご」と、その用いられ方について、解説がきちんと行われていないことが明らかになった。(4)尊敬表現形式は3通りあるのだが、もしそれらに使い分けの規則があるとするれば記述されるべきであろう。「一れる／一られる」を用いる尊敬表現形式についての解説は、調査した3種類のテキストにおいて、それぞれ異なっていたが、教授者としては、そのまま鵜呑みにする事なく、現実に即した正確な情報を得るよう努力する必要がある。(5)敬語と言うものが単に敬意を表すと言う解説は、さすがなされていないが、現代社会における言語生活を円滑に行うための機能としての役割についてはきちんと述べておく必要があると考える。(6)

テキストにより、その解説の仕方及び量に違いがあると言うのが現実であるので、教授者は、そのテキストに書かれていることしか教えない(教えられない)と言うのではなく、先にも述べたように、学習者が適切な日本語を運用することができるようになるために必要な情報は不足なく与えなければならぬと考える。

引用文献

- 1) Association for Japanese-Language Teaching (1990) *Japanese For Busy People I* (1984) & II (全30課+40課) 講談社インタナショナル
- 2) 文化外国語専門学校編 (1987) 『文化初級日本語 I』 『文化初級日本語 I II』 (1987) (全37 課) 凡人社
- 3) Susumu Nagara 他 (1990) *Japanese For Every-one* (全27課)
- 4) Tsukuba Language Group *Situational Functional Japanese vol.1* (1991), 2 (1992), & 3 (1992): Notes (全24課) 凡人社

参考文献

- 川口義一 (1987) 「日本語初級教科書における敬語の扱われかた」 『日本語教育』 61号

A. Study on How 'Keigo' is Handled in Beginning Level Textbooks

Yuko WATANABE (Hyogo University)

It is the authentic Japanese that teaching Japanese professionals must teach to their students. Information or knowledge on 'Keigo' including 'honorific terms' and 'humble terms', and the way to make use of it are usually taught through textbooks. Four textbooks were investigated concerning 'Keigo' items or expressions using 'Keigo'. Various 'Keigo' forms were observed throughout each text. ('Keigo' items were not concentrated in one particular lesson.) One of the problems is the way to use the word 'polite' to explain 'Keigo'. In addition, it has become clear that each text gives different explanation on a certain honorific form, or '-reru/-rareru'. The teaching Japanese professionals' duty is to gather necessary and proper information or knowledge on how to use 'Keigo' in the real society where Japanese is spoken, because only the concept of 'honorific' and 'humble' cannot explain the usage of 'Keigo'.

Key words: teaching Japanese, 'Keigo' forms, honorific, humble